

聖書: ヨシュア記 6:1-27

説教題: ときのをあげる日まで

日 時: 2010年5月16日

今日の章には約束の地でのイスラエルの最初の戦いが記されています。イスラエルは城壁の町エリコに大勝利を収め、幸先の良いスタートを切ります。でもある方はここを読んで眉をひそめるかもしれません。21節に「彼らは町にあるものは、男も女も、若い者も年寄りも、また牛、羊、ろばも、すべて剣の刃で聖絶した。」とあります。先住民にこのようなことをして良い権利がイスラエルのどこにあるのか。またこのことを命じる神は、新約聖書の愛の神と調和しないのではないか、という疑問です。5月から礼拝後に求道者会を行なっていますが、先々週の終りに、この次は「聖絶」について話して下さいとのリクエストがあつて、先週そのことを見ました。そして今日のヨシュア記6章でその聖絶が行なわれています。求道者会に出席された方は復習になりますが、まずそのことから見て行きたいと思います。

聖書は、主がイスラエルをエジプトから救い出し、約束の地カナンへ導かれたこと、その際、先住民たちを絶ち滅ぼすように命じたことを記していますが、これは決して神の身勝手な行動ではありません。まず創世記15章16節を参照します。「そして、四代目の者たちが、ここに帰って来る。それはエモリ人の咎が、そのときまでに満ちることはないからである。」ここで主はアブラムの子孫が約束の地を受け継ぐのはすぐではないこと、それはエモリ人の咎が満ちた時にであると述べています。ここに暗示されていることは、主はカナンの人々の悪に忍耐しておられること、しかしその罪が限界を超えた時に主はイスラエルを「神のさばきの使い」としてその地に送られるということです。従ってカナンの先住民は決して罪のない憐れな犠牲者ではない。彼らは神の忍耐をいいことに、罪に罪を重ねてついにふさわしい報いを刈り取った人たちなのです。他の箇所にも、たとえばレビ記18章に主の忌み嫌う罪が列挙された後、24～25節にこうあります。「あなたがたは、これらのどれによっても、身を汚してはならない。わたしがあなたがたの前から追い出そうとしている国々は、これらのすべてのことよって汚れており、このように、その地も汚れており、それゆえ、わたしはその地の咎を罰するので、その地は、住民を吐き出すことになるからである。」

しかしある人は言うかもしれません。ではイスラエルはどうなのか。イスラエルは罪が一つもないほど、神の前に清いのか、と。それについては申命記9章4～5節:「あなたの神、主が、あなたの前から彼らを追い出されたとき、あなたは心の中で、『私が正しいから、主が私にこの地を得させてくださったのだ』と言ってはならない。これらの国々が悪いために、主はあなたの前から彼らを追い出そうとしておられるのだ。あなたが彼らの地を所有することのできるのは、あなたが正しいからではなく、またあなたの心がまっすぐだからでもない。それはこれらの国々が悪いために、あなたの神、主が、あなたの前から彼らを追い出そうとしておられるのだ。云々」イスラエルは主のご臨在がある特別な国として、主の道具として用いられました。しかし一方でそのイスラエルが主を侮り、罪を犯すなら、そのイスラエルも聖絶されたことを私たちは覚えるべきです。モーセが十戒を受けている間、山のふもとで偶像礼拝に興じていた者たちがそこで滅ぼされましたし、またヨシュア記7章では、聖絶のものを盗んだアカンが聖絶されます。また後にはバビロン捕囚がイスラエルの罪に対する聖絶として語られています(エレミヤ25:8～9)。

ですから不正は何もありません。あるのは限度を超えた悪に対する正義の実行です。そしてやがての審判の日には、すべての悪に対する最終的な聖絶が最後のさばきという形でなされます。そのひな型がここにあるのです。そしてここから分かることは、主はただご自身が直接悪を罰されるだけでなく、そのプロセスに私たちをも用いるということです。言い換えれば私たちも神の国の広がりのための戦いに招かれているということです。もちろん今日、旧約のイスラエルのように、武力による聖絶を執行するように選ばれている国はありません。ですから私たちはこれを今日の戦争に当てはめて、それを正当化することはできません。しかし私たちはエペソ書 6 章にありますように、霊的な戦いのただ中にあります。カナンの地の悪がさばかれ、その地が神の支配の満ち溢れる所となるようにと戦うよう、イスラエルが召されたように、私たちも神の御国が広がることのために、神と共に悪と戦うように召されています。その日々の戦い、暗闇の力との戦いにこそ、今日の箇所を適用して行くべきでしょう。

さて今日の章のイスラエルの戦いの課題はいかに大きかったが 1 節にあります。「エリコは、イスラエル人の前に、城門を堅く閉ざして、だれひとり出入りする者がなかった。」 エリコの住民はイスラエルを恐れて城門を堅く閉ざしていたのですが、一方ではそのように閉ざされてはイスラエルが付け入る隙もなくなってしまいます。イスラエルの前にあるのは、この難攻不落の城壁です。しかし主の方法は不思議です。主は 2 節で「見よ。わたしはエリコとその王、および勇士たちを、あなたの手に渡した。」と語った後、何を命じたでしょう。何と主の方法は町の周りを一日一回ずつ、6 日間回ること。そして 7 日目には 7 度町を回り、祭司たちが吹く長い角笛を音を聞いたなら、民は大声でときの声をあげるといふものです。軍事的な指示は一切ありません。強調されているのは、主の契約の箱の存在です。6~9 節から分かることは、まず武装した者たちが先頭に立つ。その後 7 人の祭司たちが雄羊の角笛をもって進む。その後「契約の箱」。そしてしんがりに武装した者がつく。また角笛も主の臨在を表すものです。出エジプト記 19 章を見ると、モーセがシナイ山で十戒を受ける時、主の臨在が様々な形で現れましたが、その一つとして角笛の音が非常に高く鳴り響いたことが繰り返されています。また 7 人の祭司、7 つの角笛、7 日間にわたる行進、7 日目には 7 回回るといふ「7」という数字も完全数を意味していて、これが宗教的な行進であることを示しています。

こんなことをしてエリコの城壁がどうにかなるのでしょうか。しかしこのことを通して、エリコにおける勝利は全く人間の力や知恵によるものでないことがはっきり示されるのです。その勝利はただ主によって与えられるもの。そして読み進んで行くと分かりますように、20 節で確かにエリコの城壁が崩れ落ちます！人間が指一本触っていない間に！です。このことは私たちが召されている戦いにおいても、私たちは自分の力や知恵によって戦うのではないということを教えてくれます。私たちはただ主の力によって戦うように召されています。このことを覚える時、どんなエリコの壁を前にしても、私たちには希望が与えられます。

しかしこのヨシュア記 6 章は、主の不思議にあずかるために、私たちの信仰の応答が必要であることも教えています。3 つの特徴を見ることが出来ます。その一つ目は「沈黙」です。10 節でヨシュアはこう命じました。「私がときの声あげよと言って、あなたがたに叫ばせる日まで、あなたがたは叫んではいけない。あなたがたの声を聞かせてはいけない。また口からことばを出してはならない。」人は不安な時、口から何か言葉を出さずにいられないものです。自分の力で何とかしようと、あれこれ慌てて、色々なことを考えたり、口にしたりします。そのような時、まず静かにする。黙って主を待

ち望み、主に信頼するのです。行進している間にはエリコの住民からあざけりの言葉も飛んで来たでしょう。「ただ町の周りを回って何になるのか。そんなことで勝利できると思っているのか。なぜこちらに攻め入ろうとしない？臆病イスラエル！」思わず「何を！」と応戦したくなる言葉もあったかもしれません。しかし彼らはひたすら主にのみ信頼を置き、一人も口を開けなかった。そして黙々と行進したのです。これは私たち皆にとっても必要なレッスンではないでしょうか。

二つ目は「服従」です。今回主が示された方法は、人間の知恵からすればナンセンスです。こんな行進を何回したところで、一体エリコの城壁はどうなると言うのでしょうか。しかし人間の考えでは何の意味もないと思われる主の方法に彼らは従った。その服従の歩みに主のみわざは現れて行ったのです。

そしてもう一つ注目すべきは「最後まで」彼らは従ったということです。イスラエルは初めの6日間、宿営地に戻るたびにどんな気持ちになったでしょうか。主の言われた通りにやって見たが、何一つ変わったようなことはない。日が進むにつれ、城壁のかけらでも崩れて行ってくれたら大きな励みになったでしょうが、そんな兆候は少しもない。しかし、従う歩みを始めても、途中で投げ出してしまったら、神の栄光を見ることはできません。似たような記事として思い起こされるのは、ナアマン將軍の癒しの記事です。ナアマンはツアラアトに冒されて、エリシャのところに癒し求めてやってきましたが、彼から「ヨルダン川へ行って、七たびあなたの身を洗いなさい。そうすればきよくなります。」と言われて最初は怒ります。「なぜ私の国の立派な川ではなく、イスラエルの川に身を浸さなければならないのか。」と。しかししもべのアドバイスを受け入れ、実行してみます。1回身を浸しても何も変わりはなく、2回浸してみても変わりなし。3回浸しても、4回浸しても、何の変化の兆しもありません。だからと言ってそこでやめたら、ナアマンは主の癒しを頂くことはできなかつたでしょう。しかし彼はエリシャの言葉に従って、7回ヨルダン川に身を浸した。その時に、「彼のからだは元どおりになって、幼子のからだのようになり、きよくなった」のです。今日の章も同じです。6日間の行進を経ても、あるいは7日目の6回目までの行進を経ても何も変わりはありません。しかし主の命令に「最後まで」従った時、エリコの城壁は崩れ落ちたのです！ヨシュアの合図を受けて、ときを声を一斉にあげた途端、エリコの城壁は轟音をたてて崩れ、彼らはまっすぐ町へ入って行った。そして指示通り、ラハブとその家族を救い出し、この町を聖絶した。最後27節に、ヨシュアのうわさは地にあまねく広まったと記されています。

私たちも日々、霊的な戦いのただ中にあります。それぞれの遣わされたところで悪と戦い、主のご支配が拡がることのために仕えるように召されています。その取り組みにおいて私たちがより頼むべきは主なる神様。主こそが私たちの目の前のエリコの城壁を今日の章と同じように打ち破って下さる。私たちの生活にも6日目までのイスラエルのように、何の良い変化も見られない日々があるかもしれません。主に従っていて良いことはあるのか、と思われる毎日があるかもしれません。しかし主はご自身の方法によって私たちの戦いを導いて下さいます。私たちはその方を見上げ、その方にこそ望みを置いて、最後まで従って行きたいと思えます。その時に、時満ちて、主はご自身の恵みと力を大いに現わし、私たちに勝利を与え、ご自身の御国確立とそのさらなる発展のために私たちを尊くお使い下さるのです。